

【研究資料】

スポーツの直接観戦がもたらす影響と運動・スポーツ参画状況の関連  
—マスタース甲子園を事例とした観戦者調査から—

乾 順紀<sup>1)</sup>, 水野風紗<sup>2)</sup>, 三浦敬太<sup>3) 4)</sup>, 山下耕平<sup>3)</sup>, 長ヶ原誠<sup>3)</sup>

**Associations Between the Effects of Watching Sports Directly and Sport Involvement**  
**—From a Spectator Survey of the MASTERS KOSHIEEN—**

Junki Inui<sup>1)</sup>, Nagisa Mizuno<sup>2)</sup>, Keita Miura<sup>3) 4)</sup>, Kohei Yamashita<sup>3)</sup>,  
Makoto Chogahara<sup>3)</sup>

---

1) 大阪成蹊大学教育学部

〒533-0007 大阪府大阪市東淀川区相川 3 丁目 10-62

Faculty of Education, Osaka Seikei University

3-10-62 Aikawa, Higashiyodogawa-ku, Osaka 533-0007, Japan

第 1 著者 E-mail : divine\_wind\_junki39@yahoo.co.jp

2) 株式会社カネカ（大阪本社）

〒530-8288 大阪市北区中之島 2-3-18

KANEKA CORPORATION

2-3-18, Nakanoshima, Kita-ku, Osaka 530-8288, Japan

3) 神戸大学大学院人間発達環境学研究科

〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲 3-11

Graduate School of Human Development and Environment,

Kobe University, 3-11 Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe, Hyogo, 657-8501, Japan

4) 神戸親和大学教育学部

〒651-1111 神戸市北区鈴蘭台北町 7 丁目 13-1

Faculty of Education, Kobe Shinwa University

7-13-1 Suzurandai Kitamachi, Kita-ku, Kobe, Hyogo 651-1111, Japan

**Abstract**

This study aimed to clarify the effects of direct sport watching on spectators and to examine whether these effects are associated with the spectators' sport involvement. The participants were companions of players who attended the MASTERS KOSHIEEN at Hanshin Koshien Stadium. Data were collected using Google Forms on the day of the event (November 8, 2025) and from November 14 to 24, 2025. The questionnaire consisted of demographic characteristics, sport involvement, and open-ended questions responses regarding the effect of watching sports. Regarding sport involvement, participants were asked about the frequency of sports participation, direct and indirect sport watching during the previous year. Open-ended questions asked about the effect of watching on the event day and the future impact on themselves. Responses to the open-ended questions were categorized, and the relationships between three frequency groups for each type of sport involvement and the future impact were examined using correspondence analysis and cluster analysis.

As a result, 7 categories of future impacts were identified, including “motivation to participate in sports,” “motivation to watch sports,” and “deepening and broadening of bonds.” Furthermore, correspondence analysis revealed that these future impacts were characteristically associated with the frequency of each type of sport involvement. The group that participated in sports regularly showed a correlation with increased motivation to ‘participate’ and ‘watch.’ On the other hand, the group that did not participate showed a correlation with motivation to ‘support’ sports and expectations for future competitions and athletes. Similar patterns were also observed in the analyses of both direct and indirect sport watching.

Overall, these findings suggest that the effects of direct sport watching vary according to spectators' sport involvement and have the potential to promote diverse forms of sport involvement.

キーワード：スポーツ観戦，アマチュアスポーツ，コレスポンドンス分析

**Keywords : watching sports, amateur sports, correspondence analysis**

## 1. 緒言

高齢社会において注目される「生きがい」は、幸福感や *well-being* と深く関連し、スポーツ参画がその形成に寄与するとされる（スポーツ庁、2025）。近年、わが国ではスポーツの価値を競技力向上や健康増進のみならず、人々の QOL や地域社会の活性化に資するものとして捉える考え方が広がっている。第 2 期スポーツ基本計画（スポーツ庁、2017）では、スポーツを「する・みる・ささえる」関わりが好循環を生むとして、これら 3 つの関わりを合わせたスポーツ「参画」人口の拡大を目指すことが掲げられた。また、2025 年 9 月施行の改正スポーツ基本法でも、国民一人一人と社会のウェルビーイングの向上を図るために「全ての国民にスポーツに親しむことのできる機会等を確保」する考え方が追加されている。このように、国はスポーツとの関わり方を競技種目の実施に限定せず多面的に捉えることで運動・スポーツに関わる人口のすそ野を広げる方向性を示している。スポーツ庁（2025）によると、過去 1 年間で週 1 日以上スポーツを実施した割合は 52.5%、ささえる活動をした割合は 9.7%と報告される中で、過去 1 年間にスポーツを直接または間接観戦した人は 68.5%と最も高い割合である。参画する人口の多さを鑑みても、特に「みる」スポーツがもたらす影響については幅広い対象に検討が進められることになる。

スポーツ観戦に関する研究は、主にプロスポーツを対象として発展してきた。これまでに観戦動機や観戦満足度、再観戦意図などを扱う研究を中心に進められ、スポーツ観戦を消費行動として捉える視点から多くの知見が蓄積されている(Biscaia et al., 2023)。また、観戦行動の規定要因研究や特徴分類を行う研究も多くみられ、観戦行動が何によって形成されるのか、観戦後にどのような行動につながるのかといった視点で、その効果・影響や特徴が明らかにされている（大友・清水，2009；下窪，2022 ほか）。

近年では、スポーツ観戦が観戦者の *well-being* や社会的つながりに与える影響を示唆する研究も増加している。スポーツ観戦とその後の健康・*well-being* について、スポーツ観戦と健康の縦断的な関連性を検討した川上ほか（2025）は、観戦行動と健康的な生活習慣や良好なメンタルヘルスとの関連を示唆している。しかし、実際にスポーツ観戦を通じた身体活動促進の効果や健康効果を検討した研究は世界的にみても依然として少なく（川上，2026）、特に、スポーツ観戦による影響が観戦者の運動・スポーツ実施状況や観戦習慣とどのように関連し得るのかについては、具体的な知見の蓄積が少ない。つまり、観戦行動と運動・スポーツ実施との間には正の相関関係が示唆されているものの、その影響の大きさやスポーツ観戦と運動・スポーツ参画の関連性については十分に検証されていないことが指摘できる。

一方で、スポーツ観戦が運動・スポーツ参画促進の契機となり得るのであれば、観戦による影響を通じたその過程を明らかにすることはスポーツ政策やスポーツ振興施策を検討する上でも重要な示唆となる。また、観戦による影響と観戦者の運動・スポーツ参画習慣との関連に特徴を見出すことができれば、観戦行動を運動・スポーツ実施へと接続するうえで具体的かつ有意義な視点を提示ができるものと考えられる。よって本研究では、スポーツの直接観戦が観戦者にもたらす影響を明らかにし、その影響は観戦者の運動・スポーツ参画状況に関連するのかを検証することを目的とした。

## 2. 先行研究の検討

スポーツ観戦研究は、主にスポーツマネジメントおよびスポーツ消費者行動研究の文脈で発展してきた。代表的な研究テーマとしては、観戦動機、観戦満足度、再観戦意図などが挙げられる (Biscaia et al., 2023)。「みるスポーツ」を提供するスポーツ組織にとっては、スポーツプロダクトを効率よく提供するために観戦者の特性や心理的な特性を理解することは必要不可欠であるとされる (高田ほか, 2008)。ゆえに観戦市場の細分化は重要であり、観戦者を類似したもの同士で分類し、観戦者の特徴を明らかにすることは関連する研究分野においても重要なテーマである (元・北村, 2006 ; 山下ほか, 2019)。スポーツファンや観戦者をセグメンテーションの手法を用いて分析し、その特徴を分類・比較しながら理解することの有用性はこれまでの研究からも明らかである (Alexandris and Tsiotsou, 2012 ; Doyle et al., 2013 ほか)。

わが国においても、プロスポーツ観戦者を対象とした研究を中心に観戦満足度や再観戦意図に関する研究が行われてきた。大友・清水 (2009) は、大学生を対象にスポーツ観戦行動と意思決定要因を測定する尺度を新たに開発し、観戦行動には金銭的支出を伴う直接的消費行動とメディアを通じた間接的消費行動の 2 つの側面があることを明らかにした。また、山下ほか (2019)・松岡ほか (2022) は、ラグビー観戦者を対象としたクラスター分析により 5 つのセグメントを抽出し、人口統計的属性や観戦行動、今後の観戦意図に明確な違いがあったことを報告している。さらに下窪 (2022) は、スポーツ観戦者を観戦種目の多様性や特徴に応じて「高寛容層」「中寛容層」「不活発層」などのクラスに分類し、性別、世帯年収、職業、過去の運動経験といった社会的属性が、それぞれのクラスの観戦行動や動機に強く影響していたことを明らかにしている。

近年では、スポーツの価値をより広く捉える観点から、スポーツ観戦がもたらす観戦者の

1 心理的・社会的影響に注目した研究も増加している。スポーツ観戦との関連では、主観的健康  
2 康 (James et al., 2014), 生活充実感 (ADAPPC, 2022), 高齢者における抑うつ症状, 有病  
3 率の低さ (Arai et al., 2010) などとの関連がそれぞれ報告されている。また, プロ野球, 陸  
4 上競技など特定の競技種目の観戦との関連についても, 抑うつ症状の低下 (Furukawa et al.,  
5 2008), 主観的幸福感の向上 (Nishi et al., 2018), 地域愛着 (紺田・富山, 2021) という形  
6 で多岐にわたるポジティブな関連の報告がみられる。さらに川上ほか (2025) は, スポーツ  
7 観戦とその後の健康・well-being の関連を検討している。彼らはスポーツ観戦と健康の縦断  
8 的な関連性を検討し, 健康的な生活習慣や良好なメンタルヘルス, ワークエンゲージメント  
9 との関連を示唆している。しかし, 既存研究の多くは短期的・心理的効果 (幸福感や感情的  
10 高揚など) に焦点を当てたものが多く (Du et al., 2025), スポーツ観戦を通じた実際の身体  
11 活動促進の効果, 健康効果を検討した研究は世界的にみても依然として少ない (川上, 2026)。  
12 一方, 観戦行動と運動・スポーツ実施の間にはポジティブな関連が示唆されている。林ほ  
13 か (2004) によれば, オリンピックやサッカーW 杯のようなスポーツイベントの観戦によ  
14 って個人がスポーツを開始したり活動的になる可能性が報告されている。2012 年のロンド  
15 ン五輪開催に際しては, Weed et al. (2009) によってデモンストレーション効果や浸透効果  
16 が提唱され, トップレベルのスポーツを観る・接触する経験によって人々のスポーツへの態  
17 度や行動が変化し, 実際の運動実施の開始や頻度増加に影響を与えることが示唆された  
18 (Wicker and Sotiriadou, 2013)。また, Beaton et al. (2011) や Ko et al. (2017) は, 個々が持  
19 つスポーツ関与の程度によって各々のスポーツ消費行動や意思決定が異なることを報告し  
20 ており, スポーツに対して高関与の人は低関与の人よりも頻繁にスポーツを直接観戦, もし  
21 くはスポーツイベントに参加することを明らかにしている。これらのことから, 直接観戦を  
22 通じて選手の活躍や競技の魅力に触れることで, 自らも運動・スポーツを実施したいという  
23 意欲が高まったり, スポーツに関わりたいという意識が醸成されと考えられる。つまり,  
24 スポーツの直接観戦は観戦者の観戦後の運動・スポーツ参画にも影響を及ぼす可能性があ  
25 ると考えられる。ただ, スポーツへの直接的な参加と観戦・ボランティアのような間接的な  
26 参加との関連性については検証が十分蓄積されておらず (菅原, 2019), 観戦により受ける  
27 影響と観戦者の普段の運動・スポーツ参画状況がどのように関連するのかについては検討  
28 の余地がある。

29 また, スポーツ観戦が幸福感や心理的健康, 社会的つながりなどにポジティブな影響を及  
30 ぼすことは報告されているが, その多くは観戦直後の影響についてであり, 観戦によって受

けた影響がその後の運動・スポーツ実施や観戦行動にどのようなにつながるのかを検討した研究はあまりない (Du et al., 2025 ; Kawakami et al., 2024). さらに, 先行研究ではプロなどのトップレベルのスポーツ観戦を対象とした検討が多く, 観戦するスポーツの特徴や観戦者と競技者との関係性に着目した検討はあまりない. 特に, マスターズスポーツのように, 競技者の過去のスポーツ経験や家族など他者との関わりといった面が深く関連するスポーツイベントにおいて, 観戦者がどのような影響を受けるのかは明らかになっていない.

そこで, 本研究ではマスターズスポーツイベントの 1 つとして開催されるマスターズ甲子園を取り上げる. マスターズ甲子園は, 高校硬式野球部 OB が出身校別にチームを結成し, かつての仲間とともに再び甲子園を目指す大会であり, 選手の家族や同窓生なども観戦者として関わるという特徴を有する. このような点から, マスターズ甲子園の観戦は, 競技そのものを観る経験に加えて, 観戦者の過去の経験や家族・同窓生との関係性などと結びついた経験となる可能性がある. このような大会の観戦によって観戦者がどのような影響を受け, その影響が観戦者の運動・スポーツ参画状況とどのように関連するのかを明らかにすることは, 「みる」を契機とした運動・スポーツ実施人口の拡大を考えるうえでも重要であると考えられる.

### 3. 方法

#### 3.1 調査対象

調査対象は, 第 22 回マスターズ甲子園 2025 本大会を観戦しに阪神甲子園球場に会場した出場チーム選手の同伴者 (配偶者やその他家族, 同窓生など) とした. 調査方法は Google フォームを用いたアンケート調査とし, 期間は大会当日の 2025 年 11 月 8 日および 11 月 14 日～24 日までの計 11 日間であった. マスターズ甲子園とは, 「全国の高校野球 OB/OG が, 性別, 世代, 甲子園出場・非出場, 元プロ・アマチュア等のキャリアの壁を超えて出身校別に同窓会チームを結成し, 全員共通の憧れであり野球の原点でもあった『甲子園球場』で白球を追いかける夢の舞台を目指そうとするもの」であり, 2004 年に第 1 回大会が始動して以来, コロナ禍の 2020 年を除いて毎年開催されている単一競技型のマスターズスポーツ全国大会である (マスターズ甲子園大会オフィシャルサイト, online). 本研究においてマスターズ甲子園を取り上げる理由には, ①高校硬式野球部 OB が出身校ごとにチームを結成し, 過去の競技経験を基盤として競技するマスターズスポーツとしての特徴を有すること, ②選手にとって旧友との再会や再挑戦の場であるとともに, 家族や同窓生などが観戦者とし

て関わるイベントであること、③「する」だけでなく、「みる」「ささえる」といった複数の参画形態が生じるイベントであること等が挙げられる。

### 3.2 調査内容

調査内容は、①個人属性（性別，年代），②運動・スポーツ参画状況，③観戦による影響に関する自由記述で構成された。運動・スポーツ参画状況については、直近1年間における「運動・スポーツ実施頻度」「直接・間接観戦頻度」「ボランティア参加頻度」を「実施していない」～「週に3日以上」の7段階のリッカート尺度で尋ね、自由記述については、チームの本大会出場決定から当日の観戦を経た自身への影響（マスターズ甲子園本大会出場前から選手と時間を過ごし、本日の試合観戦を経て、これまでにあなた自身にどのような影響がありましたか？）と、今後予測される自身への影響（マスターズ甲子園全体を通して、今後あなたにどのような影響がありそうですか？）を分けて尋ねた。

### 3.3 分析方法

本研究では、スポーツの直接観戦によって生じる影響を自由記述から抽出し、その意義を包括的に明らかにすることを試みた。2つの自由記述回答の分析については、大谷（2008）の質的データのコーディングに関する考え方を参考にした。まず観戦者にとって影響がないと判断された回答を除外したうえで、意味内容や文脈に留意しながら記述内容を要約したコードを生成した。生成したコードについて、意味内容や類似性を比較検討し、類似する内容をまとめてカテゴリ化した。さらに、小カテゴリ間の共通性や関連性を吟味し、内容を統合して大カテゴリを生成した。なお、カテゴリ化はデータから帰納的に行った。その際、筆頭著者とスポーツ社会学を専門とする大学教員、博士課程大学院生との間でトライアングレーションを行い、コードおよびカテゴリの内容や分類の妥当性について検討した。そして、観戦直後に受けた影響がその後に見通される自身への影響にどのようにつながる・変化するのか2つの自由記述内容を比較検討した。さらに、観戦者の現在の運動・スポーツ参画状況によって今後見通される影響にも特徴がみられるのか検証するため、「今後予測される自身への影響」と運動・スポーツ実施、直接観戦、間接観戦の各頻度を3群（定期的・不定期・非実施）に分類したものとの間でコレスポネンス分析およびクラスター分析を行った（ボランティアについては参加の割合が低く、群に分けることができなかったため、分析からは除外した）。なお、統計解析には IBM SPSS Statistics ver.32 を用いた。

#### 4. 結果

表 1 に属性の内訳を示す 122 名より自由記述を含む回答が得られた。まず「本大会出場決定から当日の観戦を経た自身への影響」の自由記述の有効回答 120 件を分類した結果、「スポーツ参画意欲の向上」「感情移入と共感」「肯定的な情動の喚起」「絆の深まりと広がり」「価値観への刺激」「スポーツのイメージ向上」の 6 カテゴリが抽出された（表 2）。また、「今後予測される自身への影響」の自由記述の有効回答 122 件を分類した結果、「スポーツ参画意欲の向上」「絆の深まりと広がり」「今後の原動力」「新たな活動意欲の喚起」「観戦対象への期待」が抽出された。このうち、スポーツ参画意欲の向上については「する意欲」「みる意欲」「ささえる意欲」から構成されたが、各参画状況との検討を行う点から 3 つを区別した 7 カテゴリとして抽出し、以降の分析に用いた（表 3）。

表 1. サンプルの属性と運動・スポーツ参画状況

表 2. 「チームの本大会出場決定から当日の観戦を経た自身への影響」の分類結果

表 3. 「今後予測される自身への影響」の分類結果

続いて、「今後予測される自身への影響」と運動・スポーツ参画状況との関連を検討するため、影響 7 カテゴリと実施頻度、直接観戦頻度、間接観戦頻度（各 3 群）の間でそれぞれコレスポンデンス分析を行った。その結果、各グループの布置とその意味内容を踏まえ、3 グループによる類型化が妥当と判断された（図 1）。さらに、コレスポンデンス分析によって把握されたカテゴリ間の関係を補助的に検討するため、今後予測される自身への影響のカテゴリと各参画状況の頻度カテゴリを用いて Two-Step クラスタ分析を行った。距離尺度には対数尤度を用い、クラスター数は 3 に固定した。その結果、対象者は 3 つのクラスターに分類され、クラスター分析の結果は、コレスポンデンス分析で示されたカテゴリ間の近接関係と概ね整合していた。なお、クラスターの凝集性と分離性を示すシルエット指標は、いずれの分析においても「良い」と判定された。

まず運動・スポーツ実施頻度との関連では、定期的実施群は「する意欲」「みる意欲」「今後の原動力」と近接していた。これは、日常的にスポーツをする人は観戦を通じて、自分もスポーツをしたい、引き続き観戦したい、夢や目標の再見、元気や活力をもらおうといった“活力・参画促進的”影響を受ける傾向があることを示唆する結果であった。一方、不定期実施

群は「絆の深まりと広がり」「新たな活動意欲の喚起」と関連しており、観戦を通じて、仲間や家族とのつながりを再認識する、再び／新しいことに挑戦したい、という“関係・活動促進的”影響を受ける傾向がみられた。さらに、非実施群は「ささえる意欲」「観戦対象への期待」と関連する傾向がみられ、観戦を通じて、（自分では実施しないが）スポーツ活動を支援・応援したいという“支援・期待志向的”影響を受ける傾向がみられた。

次に、直接観戦頻度との関連では、定期的観戦群は「今後の原動力」「観戦対象への期待」と近接していた。つまり頻繁に直接観戦する群には、観戦を通じて、夢や目標の再見、元気や活力をもらう、選手やチームへの今後の期待という“活力獲得的”影響を受ける傾向がみられた。不定期観戦群は「ささえる意欲」「絆の深まりと広がり」と関連し、観戦を通じて、スポーツ活動を支援したい、仲間や家族とのつながりを再認識するといった“関係形成・支援促進的”影響を受ける傾向がみられた。非観戦群は「みる意欲」「新たな活動意欲の喚起」と関連する傾向が認められ、観戦を通じてまた観戦したい、再び／新しいことに挑戦したいといった“潜在的参画・活動促進的”影響を受ける傾向がみられた。

また、間接観戦頻度との関連では、定期的観戦群は「する意欲」「みる意欲」と近接していた。つまり、日常的に間接観戦している人は観戦を通じて、自分もスポーツをしたい、引き続き観戦したいという“参画深化的”な影響を受ける傾向がみられた。不定期観戦群は「絆の深まりと広がり」「観戦対象への期待」と関連しており、観戦することで仲間や家族とのつながりを再認識する、選手やチームへの今後の期待という“関係・期待形成的”影響を受ける傾向がみられた。非観戦群は「ささえる意欲」「新たな活動意欲の喚起」「今後の原動力」と関連する傾向が認められ、観戦することでスポーツ活動を支援したい、再び／新しいことに挑戦したい、夢や目標の再見、元気や活力をもらうという“動機づけ・活動促進的”影響を受ける傾向がみられた。

図 1. 今後予測される自身への影響と運動・スポーツ参画状況との関連

## 5. 考察

まず、「甲子園出場決定から当日の観戦を経た自身への影響」と「今後予測される自身への影響」の2つの自由記述回答から、スポーツの直接観戦がもたらす影響を観戦直後とそれ以降で比較して考察する。2つの自由記述回答の分類の結果、「スポーツ参画意欲の向上」「絆の深まりと広がり」のようにそれぞれに共通したカテゴリも形成されたが、「感情移入

と共感」「肯定的な情動の喚起」「価値観への刺激」といった観戦直後における心理的・情意的影響の占める割合が、今後予測される影響においては「今後の原動力」「新たな活動意欲の喚起」という以降の活動のモチベーションに変容することが示唆された。スポーツ観戦が幸福感や心理的健康、社会的つながりなどにポジティブな影響を及ぼすことは報告されているが、その多くは観戦直後の影響についてであり、観戦によって受けた影響がその後の運動・スポーツ実施や観戦行動にどのようにつながるのかを検討した研究は限られている (Du et al., 2025 ; Kawakami et al., 2024)。本研究では、観戦直後でも観戦者が自身にとっての直接観戦の影響を現在とその後で分けて捉えられる可能性が窺えた。つまり、観戦により受ける影響について尋ねる際には、質問の仕方に関しても留意する必要があるといえる。

なお、本研究で観察された観戦直後の「感情移入と共感」「絆の深まりと広がり」といった影響については、マスターズ甲子園という大会の特徴も考慮する必要がある。本研究の対象者は主に出場選手の家族や同窓生等であり、競技者と何らかの関係性を有していたことから、競技に対する反応に加えて、身近な人物の再挑戦や活躍を観戦する経験が、こうした心理的・社会的影響に関与した可能性が考えられる。

次に、「今後予測される自身への影響」と観戦者の現在の運動・スポーツ参画状況（運動・スポーツ実施、直接観戦、間接観戦の頻度）との関連について考察する。分析の結果、スポーツの直接観戦による今後の自身への影響は、観戦者の運動・スポーツ参画状況によって異なる特徴をもつことが示唆された。

まず、運動・スポーツ実施頻度との関連についてである。定期的実施群では、「する意欲」「みる意欲」「今後の原動力」との関連がみられたが、これは日常的にスポーツに取り組む者にとって、直接観戦の経験が既存の運動・スポーツ参画をさらに強化する役割を果たすことを示唆するものである。スポーツを観る・接触する経験によって、人々のスポーツへの態度や行動が変化し実際のスポーツ参画につながることは、デモンストレーション効果と呼ばれる (Weed, 2009)。これは観戦→触発→意欲→行動のプロセスをたどるとされるが、本結果は触発から意欲につながった段階であるといえ、デモンストレーション効果と部分的に整合する可能性がある。さらに、直接観戦経験によって形成された感情的記憶がその後のスポーツ観戦への関与を高めるという報告 (高田・青山, 2022) や、観戦への関与がその後の継続観戦やスポーツ消費行動の深化に関連するという報告 (井上ほか, 2018) など、本結果を支持する先行研究が他にもみられる。このように直接観戦によって選手の姿やプレーに刺激を受け、自らの運動・スポーツ実施や継続的な観戦行動につながるという好循環が形

1 成される可能性が示唆される。

2 一方、不定期実施群では「絆の深まりと広がり」「新たな活動意欲の喚起」との関連が認  
3 められた。スポーツ観戦は競技そのものを楽しむだけでなく、家族や友人との交流機会とし  
4 ても機能することが報告されている (Melnick, 1993)。特に本研究では、一般的なスポーツ  
5 観戦における観戦者間の交流だけでなく、既存の家族関係や同窓生としてのつながりが、選  
6 手の再挑戦を観戦することによって再認識・強化された可能性が考えられる。甲子園出場が  
7 決まってから大会当日の観戦に至るまでの間、さらに今後に向けても家族との関係性や母  
8 校を介した人とのつながりを認識すると同時に、運動・スポーツではなくとも新たな活動へ  
9 のチャレンジを促す刺激となった可能性が示唆された。

10 また、非実施群では「ささえる意欲」「観戦対象への期待」との関連がみられた。運動・  
11 スポーツをしていない者であっても直接観戦を通じて、スポーツを支援したいという意識  
12 や、今後の大会やチームの活動に期待を抱くことが示された。この点については、競技者と  
13 家族や友人、同窓生という関係性を有することで、観戦者は競技を「みる」だけでなく、身  
14 近な人物の再挑戦を応援し、その活動を支えたいという意識を持ちやすかった可能性がある  
15 る。これは、従来のデモンストレーション効果が主として「する」への影響を想定してきた  
16 のに対し、直接観戦が「みる」から「ささえる」を含む多様なスポーツ参画意欲につながる  
17 可能性を示すものと考えられる。

18 次に、今後予測される自身への影響と直接・間接観戦頻度との関連についてである。まず  
19 直接観戦では定期的観戦群と「今後の原動力」との関連が特に強くみられた一方で、間接観  
20 戦では定期的観戦群と「する意欲」「みる意欲」との関連がみられた。本研究では直接観戦  
21 の対象がプロスポーツ選手ではなく、観戦者と近い関係にある人物であった点に留意す  
22 る必要がある。現地での直接観戦は、会場特有の雰囲気や他者との空間共有を伴うため、観  
23 戦者に高い没入感や情動経験をもたらすことが指摘されている (Lee et al., 2017; 隅野・原  
24 田, 2005)。加えて、本研究の対象者にとっては、競技への没入に加えて選手個人への感情  
25 移入や応援する意識が生じやすかった可能性がある。また、テレビやインターネット等を通  
26 じた定期的な間接観戦は、日常生活の中に定着したスポーツへの接触機会として機能して  
27 おり、運動・スポーツ参画を維持・深化させる役割を担っている可能性がある。「する意欲」  
28 「みる意欲」「今後の原動力」の3つともに運動・スポーツ定期的実施群と関連がみられた  
29 カテゴリと一致することから、スポーツの定期的観戦者層が受ける今後の自身への影響は  
30 定期的実施層のそれに類似するものであり、直接観戦と間接観戦がそれぞれもたらす効果

1 によって受ける影響に特徴が分かれるものと考えられた。

2 直接観戦の不定期観戦群については、「ささえる意欲」「絆の深まりと広がり」との関連が  
3 みられたが、間接観戦の不定期観戦群についても、「絆の深まりと広がり」「観戦対象への期  
4 待」との関連がみられたことから、直接観戦・間接観戦それぞれの特徴には類似する面があ  
5 ると考えられた。普段の観戦行動が頻繁ではないからこそ、甲子園球場でプレーする家族や  
6 友人の姿を直接観戦する経験から人とのつながりや応援したいという思いを感じやすくな  
7 る可能性がある。「絆の深まりと広がり」については、ここでも運動・スポーツ不定期実施  
8 群で関連がみられたカテゴリと一致しており、頻度別の習慣でみた場合の運動・スポーツ参  
9 画状況には、実施と観戦で似た傾向が形成される様子が窺えた。

10 さらに、直接観戦や間接観戦を行わないと回答した非実施層では、「新たな活動意欲の喚  
11 起」や「みる意欲」「ささえる意欲」「今後の原動力」といったカテゴリとの関連がみられた。  
12 スポーツの観戦習慣がない層にとってこそ現地での直接観戦は非日常的経験となるため、  
13 そこで受ける刺激はその後の行動変容の契機となる可能性がある。そうであれば、スポーツ  
14 との関わりが少ない層に対しても、直接観戦が運動・スポーツ参画を考える契機となる可能  
15 性がある。直接観戦の非実施層であってもまた観戦したい、自分も何かに挑戦したいという  
16 思いを抱き、間接観戦の非実施層についても自身が運動・スポーツを実施する意欲までには  
17 至らずとも、スポーツ活動を支援する意欲を持ったり、今後に向けた元気や活力をもらおうと  
18 いった形で、非実施層として一定の影響を受けている様子が明らかになった。とりわけマス  
19 ターズ甲子園では、身近な人物が甲子園球場という象徴的な舞台で再びプレーする姿を観  
20 戦するという経験が、観戦者自身の過去の経験や今後の活動を想起させ、スポーツとの新た  
21 な関わりを考える契機となった可能性が考えられる。近年、スポーツ観戦が主観的活力や  
22 well-being の向上に寄与することが報告されているが、こうした効果は普段観戦行動をして  
23 いない層まで広く波及し得るものと考えられた。

## 6. まとめと今後の課題

26 本研究では、マスターズスポーツの一つであるマスターズ甲子園を対象として、スポーツ  
27 の直接観戦がもたらす影響を整理するとともに、今後予測される自身への影響が観戦者の  
28 運動・スポーツ参画状況によって異なるのかを検討した。その結果、スポーツの直接観戦に  
29 よる影響として、運動・スポーツ参画への意欲向上のみならず、人間関係の広がりや活力の  
30 獲得、新たな活動意欲の喚起など、多面的な影響が確認された。また、これらの影響は観戦

者の最近の運動・スポーツ実施や観戦の状況によって異なる特徴を持っていた。特に、定期的な運動・スポーツ実施者および観戦者では既存の運動・スポーツ参画を強化する影響がみられた一方、非実施者や非観戦者においても観戦対象を支援する意識や新たな活動意欲の喚起など、将来的な行動変容につながる可能性が示された。さらに、本研究の対象者は出場選手の家族や同窓生等であり、観戦者と競技者との関係性を背景とした「感情移入と共感」や「絆の深まりと広がり」「ささえる意欲」などの影響が示された。このことから、マスターズ甲子園のように、過去のスポーツ経験を共有する者が再会し、再び競技する場においては、スポーツ観戦そのものの影響に加えて、競技者との関係性や大会が有する再会・再挑戦という特徴が観戦者への影響に関係する可能性が示唆された。

本研究にはいくつかの課題が残されている。第一に、本研究で扱った「今後予測される自身への影響」は観戦直後に予測的な認識を求めた回答であり、実際にその後の行動変容が生じたことを示すものではない。加えて、分析に用いたコレスポンド分析およびクラスター分析は変数間の関連性を示すものであり、因果関係を明らかにするものではない。今後は観戦経験からスポーツ参画への影響過程を検証できる縦断的な研究デザインを用いることで、直接観戦経験が実際の運動・スポーツ参画にどのような影響を及ぼすのか、より詳細なメカニズムを検証する必要がある。第二に、本研究では運動・スポーツの実施、観戦について分析を行ったが、ボランティア参加については分析ができなかった。その理由として、ボランティア参加者の割合が少なく、実施や観戦と同様に参加の頻度で複数の群に分けることが困難であったことが挙げられる。この点はサンプル数との兼ね合いもあるため、サンプル数の十分な確保が次回への課題となる。対象者を性別や年代別で分析できていない点もこれと同様で、本研究内容を発展させ、より詳細な検討を進めるためにはこれらの特性別比較可能なサンプル数を確保するか、年代等を絞った検証を行う必要がある。また第三に、本研究では実施や観戦についてそれぞれ独立して分析したが、実際には複数の参画形態を同時に有する場合も含まれる。特徴分類を行ううえで、スポーツ庁の世論調査が「する・みる・ささえる」について、重複も含めた類型でスポーツ参画状況を公表しているように、今後は複数参画の組み合わせも考慮した分析を行うことが望ましいであろう。第四に、本研究の対象者はマスターズ甲子園本大会に出場した選手の同伴者に限定されており、同大会を観戦する一般観戦者を対象としていない点である。そのため、本結果をマスターズ甲子園の観戦者全般やアマチュアスポーツ観戦者全般に一般化することには限界がある。特に、本研究でみられた「感情移入と共感」「絆の深まりと広がり」「ささえる意欲」などには、出場選

手との家族や同窓生等としての関係性が影響していた可能性が大きい。一方で、このような対象者に焦点を当てたことで、競技者と何らかの関係性を有する観戦者が、身近な人物の再挑戦や活躍を観戦することによってどのような影響を受けるのかを捉えることができた点は、本研究の特徴である。今後は、一般観戦者や他のマスターズスポーツ大会、プロスポーツ等を対象として比較検討することで、競技者との関係性やスポーツイベントの特徴が観戦者への影響に及ぼす違いを明らかにする必要がある。

わが国の一億総スポーツ社会の実現に向けても、運動・スポーツ参画の好循環が具体的にどのように起こり得るのか、その関係性について引き続き検討を続けていきたい。

## 謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、アンケート調査にご協力をいただきました観戦者の皆さまに心より感謝を申し上げます。また、本稿の審査過程において有益なご助言を賜りました2名の査読者の先生方、ならびに編集委員長の山口志郎先生に厚く御礼を申し上げます。

## 引用文献

- Alexandris, K., and Tsotsou, R.H. (2012) Segmenting soccer spectators by attachment levels: A psychographic profile based on team self-expression and involvement. *Eur. Sport Manag. Q.*, 12(1): 65-81. <https://doi.org/10.1080/16184742.2011.637174>
- American Diabetes Association Professional Practice Committee. (2022) 2. Classification and diagnosis of diabetes : Standards of medical care in diabetes-2022. *Diabetes Care*, 45(1) : S17-S38. <https://doi.org/10.2337/dc22-S002>
- Arai, H., Yamamoto, A., Matsuzawa, Y., Saito, Y., Yamada, N., Oikawa, S., Mabuchi, H., Teramoto, T., Sasaki, J., Nakaya, N., Itakura, H., Ishikawa, Y., Ouchi, Y., Horibe, H., Kita, T. (2010) Prevalence of the metabolic syndrome in elderly and middleaged Japanese. *J. Clin. Gerontol. Geriatr.*, 1 : 42-47. <https://doi.org/10.1016/j.jcgg.2010.10.011>
- Beaton, A. A., Funk, D. C., Ridinger, L., and Jordan, J. (2011) Sport involvement: A conceptual and empirical analysis. *Sport Manag. Rev.*, 14(2) : 126-140. <https://doi.org/10.1016/j.smr.2010.07.002>
- Biscaia, R., Yoshida, M., and Kim, Y. (2023) Service quality and its effects on consumer outcomes: a meta-analytic review in spectator sport. *Eur. Sport Manag. Q.*, 23(3) : 897-921. <https://doi.org/10.1080/16184742.2021.1938630>

- 1 Doyle, J.P., Kunkel, T., and Funk, D.C. (2013) Sports spectator segmentation: Examining the differing  
2 psychological connections among spectators of leagues and teams. *Int. J. Sports Mark. Spons.*,  
3 14(2) : 22-36. <https://doi.org/10.1108/IJSMS-14-02-2013-B003>
- 4 Du, H., Baker, T.A., Su, Y., Byon, K., and Katz, M. (2025) Sport spectator well-being: A scoping  
5 review. *Sport Manag. Rev.*, 28(2) : 232-256. <https://doi.org/10.1080/14413523.2024.2421064>
- 6 Furukawa, T.A., Kawakami, N., Saitoh, M., Ono, Y., Nakane, Y., Nakamura, Y., Tachimori, H., Iwata,  
7 N., Uda, H., Nakane, H., Watanabe, M., Naganuma, Y., Hata, Y., Kobayashi, M., Miyake, Y.,  
8 Takeshima, T., and Kikkawa, T. (2008) The performance of the Japanese version of the K6 and K10  
9 in the World Mental Health Survey Japan. *Int. J. Methods Psychiatr. Res.*, 17 : 152-158.  
10 <https://doi.org/10.1002/mpr.257>
- 11 林直也・原田宗彦・Jo Lee Tea・Chon Tae Jun・Won Lee Chul (2004) W 杯の観戦が日本と韓  
12 国における中学生のサッカー行動へ与える影響に関する研究:「みる」スポーツと「する」  
13 スポーツの関連に着目して. *大阪体育大学紀要*, 35 : 1-13.
- 14 井上尊寛・松岡宏高・吉田政幸・蔵柁利恵子 (2018) スタジアムにおけるスポーツ観戦関与.  
15 *スポーツマネジメント研究*, 10(1) : 41-58. <https://doi.org/10.5225/jjsm.2018-004>
- 16 James, P.A., Oparil, S., Carter, B.L., Cushman, W.C., Dennison-Himmelfarb, C., Handler, J., Lackland,  
17 D.T., LeFevre, M.L., MacKenzie, T.D., Ogedegbe, O., Smith, S.C. Jr., Svetkey, L.P., Taler, S.J.,  
18 Townsend, R.R., Wright, J.T. Jr., Narva, A.S., and Ortiz, E. (2014) 2014 evidence-based guideline  
19 for the management of high blood pressure in adults: report from the panel members appointed to  
20 the Eighth Joint National Committee (JNC 8). *JAMA*, 311 : 507-520.  
21 <https://doi.org/10.1001/jama.2013.284427>
- 22 川上 諒子 (2026) 「みる」スポーツの健康効果. *体力科学*, 75(1) : 9.  
23 <https://doi.org/10.7600/jspfsm.75.9>
- 24 川上諒子・北濃成樹・藤井悠也・神藤隆志・甲斐裕子・荒尾孝 (2025) 日本の成人における  
25 スポーツ観戦とその後の健康・ウェルビーイングの関連性:アウトカムワイド・アプロー  
26 チを用いた縦断研究: *Preventive Medicine* に掲載された英語論文の日本語による二次出版.  
27 *体力研究*, 123 : 8-29. [https://doi.org/10.20793/tairyokukenkyu.123.0\\_8](https://doi.org/10.20793/tairyokukenkyu.123.0_8)
- 28 Kawakami, R., Kitano, N., Fujii, Y., Jindo, T., Kai, Y., and Arao, T. (2024) Association of watching  
29 sports games with subsequent health and well-being among adults in Japan : An outcome-wide  
30 longitudinal approach. *Prev. Med.*, 189 : 108154. <https://doi.org/10.1016/j.ypmed.2024.108154>

- 1 Ko, Y.J., Chang, Y., Jang, W., Sagas, M., and Spengler, J.O. (2017) A hierarchical approach for  
2 predicting sport consumption behavior : A personality and needs perspective. J. Sport Manag.,  
3 31(3) : 213-228. <https://doi.org/10.1123/jsm.2015-0142>
- 4 紺田俊・富山浩三 (2021) 陸上競技観戦者の観戦満足度と地域愛着の関係性: 開催地域観戦  
5 者に着目して. 生涯スポーツ学研究, 17(2) : 17-27. [https://doi.org/10.14838/jjls.17.2\\_17](https://doi.org/10.14838/jjls.17.2_17)
- 6 Lee, H.W., Gipson, C., and Barnhill, C. (2017) Experience of spectator flow and perceived stadium  
7 atmosphere : Moderating role of team identification. Sport Mark. Q., 26(2) : 87-98.  
8 <https://doi.org/10.1177/106169341702600204>
- 9 マスターズ甲子園大会オフィシャルサイト (online) <https://www.masterskoshien.com/>. (参照  
10 日 2026 年 7 月 2 日).
- 11 松岡宏高・姜泰安・和田由佳子 (2022) ラグビー観戦者のセグメンテーション : Two-Step ク  
12 ラスター分析の活用. マーケティングジャーナル, 42(2) : 17-28.  
13 <https://doi.org/10.7222/marketing.2022.044>
- 14 Melnick, M.J. (1993) Searching for Sociability in the Stands: A Theory of Sports Spectating. J. Sport  
15 Manag., 7(1) : 44-60. <https://doi.org/10.1123/jsm.7.1.44>
- 16 Nishi, D., Susukida, R., Usuda, K., Mojtabai, R., and Yamanouchi, Y. (2018) Trends in the prevalence  
17 of psychological distress and the use of mental health services from 2007 to 2016 in Japan. J. Affect.  
18 Disord., 239 : 208-213. <https://doi.org/10.1016/j.jad.2018.07.016>
- 19 大谷尚 (2008) 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 : 着手しや  
20 すく小規模データに適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科  
21 紀要 (教育科学), 54(2) : 27-44. <https://doi.org/10.18999/nueduca.54.2.27>
- 22 大友暁子・清水安夫 (2009) スポーツ観戦行動の規定要因に関する研究 : 社会的属性・スポ  
23 ーツ経験・意思決定要因を予測変数とした検討. Journal of Kanagawa Sport and Health  
24 Science, 42 : 14-20. [https://doi.org/10.51064/jkshs.42.0\\_14](https://doi.org/10.51064/jkshs.42.0_14)
- 25 Sedikides, C., Wildschut, T., Routledge, C., Arndt, J., Hepper, E.G. and Zhou, X. (2015) To nostalgize :  
26 Mixing memory with affect and desire. Adv. Exp. Soc. Psychol., 51 : 189-273.  
27 <http://dx.doi.org/10.1016/bs.aesp.2014.10.001>
- 28 下窪拓也 (2022) スポーツ観戦者の社会的属性の検証 : 社会経済的地位と性別の観点から. ス  
29 ポーツ社会学研究, 30(2) : 101-113. <https://doi.org/10.5987/jjsss.30-2-02>
- 30 菅原尚子 (2019) 学齢期のスポーツ参画経験と成人期以降の直接観戦行動の関係 : スポーツ

- 観戦経験と対象種目の実施経験間の持ち越し効果の比較. スポーツ科学研究, 16 : 62-78.
- 隅野美砂輝・原田宗彦 (2005) スポーツ観戦者行動における感情：尺度の開発とモデルへの  
応用. スポーツ産業学研究, 15(1) : 21-36. <https://doi.org/10.5997/sposun.15.21>
- スポーツ庁 (2017) 第 2 期 スポーツ 基 本 計 画 .  
[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm), (参照日 2026 年 7 月  
10 日).
- スポーツ庁 (2025) 令和 6 年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」(令和 6 年 11 月  
調査), [https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/toukei/chousa04/sports/1415963\\_00013.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/sports/1415963_00013.htm).
- 高田一慶・原田宗彦・備前嘉文 (2008) わが国の球技系トップリーグ観戦者に関する研究.  
スポーツ産業学研究, 18(1) : 25-42. <https://doi.org/10.5997/sposun.18.25>
- 高田紘佑・青山将己 (2022) スタジアム観戦経験に対するノスタルジアとスポーツ観戦への  
関与 コロナ禍でスポーツ観戦者が抱く懐かしさとは?. スポーツマネジメント研究,  
14(2) : 19-32. <https://doi.org/10.5225/jjism.2022-002>
- Weed, M., Coren, E., Fiore, J., Mansfield, L., Wellard, I., Chatziefstathiou, D., and Dowse, S. (2009)  
A systematic review of the evidence base for developing a physical activity and health legacy from  
the London 2012 Olympic and Paralympic Games. Centre for Sport, Physical Education & Activity  
Research (Spear).
- Wicker, P., and Sotiriadou, P. (2013) The trickle-down effect: What population groups benefit from  
hosting major sport events. Int. J. Event Manag. Res., 8(2) : 25-41.
- 元晶煌・北村薫 (2006) スポーツ経営における市場細分化戦略の活用に関する研究：市場細  
分化による観戦スポーツの潜在的な需要分析の有効性を中心に. 順天堂大学スポーツ健康  
科学研究, 10 : 29-39.
- 山下玲・姜泰安・松岡宏高 (2019) ラグビー観戦者のセグメンテーション：構造的制約要因  
によるクラスター分析を用いた検討中心として. ライフデザイン学研究, 14 : 89-100.  
<https://doi.org/10.7222/marketing.2022.044>

(2026 年 7 月 20 日受付, 2026 年 9 月 24 日受理)

表 1. サンプルの属性と運動・スポーツ参画状況

| サンプルの属性 |       |     |       | 運動・スポーツ参画状況 |             |     |      |
|---------|-------|-----|-------|-------------|-------------|-----|------|
|         |       | n   | %     |             |             | n   | %    |
| 年代      | 0～9歳  | 1   | 0.8   | 実施頻度        | 定期的実施（週1以上） | 50  | 41.0 |
|         | 10代   | 4   | 3.3   |             | 不定期実施       | 39  | 32.0 |
|         | 20代   | 14  | 11.5  |             | 非実施         | 33  | 27.0 |
|         | 30代   | 16  | 13.1  | 直接観戦頻度      | 定期的観戦（月1以上） | 27  | 22.1 |
|         | 40代   | 12  | 9.8   |             | 不定期観戦       | 77  | 63.1 |
|         | 50代   | 45  | 36.9  |             | 観戦せず        | 18  | 14.8 |
|         | 60代   | 27  | 22.1  | 間接観戦頻度      | 定期的観戦（週1以上） | 55  | 45.1 |
|         | 70代～  | 3   | 2.5   |             | 不定期観戦       | 59  | 48.4 |
| 性別      | 女性    | 78  | 63.9  |             | 観戦せず        | 8   | 6.6  |
|         | 男性    | 44  | 36.1  | ボランティア参加頻度  | 実施（年1以上）    | 16  | 13.1 |
| 選手との関係  | 配偶者   | 28  | 23.0  |             | 非実施         | 106 | 86.9 |
|         | 友人    | 26  | 21.3  | 計 122 100.0 |             |     |      |
|         | 親     | 22  | 18.0  |             |             |     |      |
|         | 同窓生   | 21  | 17.2  |             |             |     |      |
|         | 子ども   | 9   | 7.4   |             |             |     |      |
|         | きょうだい | 5   | 4.1   |             |             |     |      |
|         | 同僚    | 5   | 4.1   |             |             |     |      |
|         | 祖父母   | 1   | 0.8   |             |             |     |      |
|         | 孫     | 1   | 0.8   |             |             |     |      |
|         | その他親族 | 4   | 3.3   |             |             |     |      |
|         | 計     | 122 | 100.0 |             |             |     |      |

表 2. 「チームの本大会出場決定から当日の観戦を経た自身への影響」の分類結果

| 大カテゴリー (120)      | 小カテゴリー            | 具体例                                |
|-------------------|-------------------|------------------------------------|
| ①感情移入と共感 (34)     | 懐古・感慨 (17)        | 青春が蘇ってきて目頭が熱くなりました…                |
|                   | 期待と楽しさ (9)        | 甲子園に行ける喜び、楽しみの共有が出来て良かった           |
|                   | 幸福感の共有 (8)        |                                    |
| ②肯定的な情動の喚起 (28)   | 頑張る姿への感動 (17)     | 同級生が頑張っている姿に勇気を貰いました。              |
|                   | 勇気・刺激の享受 (6)      | いい思い出になった！自分も頑張ろうと思った！             |
|                   | 気持ちの高ぶり (4)       | 気持ちが高揚しました。日々のストレスを忘れられる素晴らしい時間でした |
|                   | 幸福感の高まり (1)       | 久しぶりに野球を見て幸福感が高まった                 |
| ③絆の深まりと広がり (20)   | 同窓の一体感確認 (7)      | 母校の野球部を甲子園で応援できることに喜びがあった          |
|                   | 同窓の活性 (5)         | 母校の応援に卒業生の輪が広まった                   |
|                   | 仲間の大切さ実感 (4)      | 年齢を重ねても、仲間と協力してスポーツに取り組む良さが分かった    |
|                   | 家族の一体感確認 (3)      | 家族が一丸となって応援している姿を見て安心した            |
|                   | コミュニケーションの増 (1)   | 野球やトレーニングについての会話が増えました             |
| ④価値観への刺激 (19)     | 夢・目標の大切さ実感 (17)   | どんな形でも、好きなことが続けられることは、幸せなことだと実感した  |
|                   | 加齢観の好転 (2)        | 歳をとることに対してのイメージが良くなった              |
| ⑤スポーツのイメージ向上 (11) | スポーツの楽しさ認識 (3)    | 今回の試合を観戦して、野球の楽しさを知ることができました       |
|                   | スポーツの好意度上昇 (1)    | 野球をもっと好きになりました                     |
|                   | 応援の楽しさ認識 (6)      | 声を出して応援して楽しかったです                   |
|                   | スポーツを通じた交流の良さ (1) |                                    |
| ⑥スポーツ参画意欲の向上 (8)  | 運動意欲の向上 (5)       | 私もなにかスポーツに参加したいと思った                |
|                   | 再観戦意欲 (2)         | 来年も甲子園に観に行きたい                      |
|                   | サポート意欲 (1)        | しっかりサポートして楽しませたいと考えました             |

表 3. 「今後予測される自身への影響」 の分類結果

| 大カテゴリー (122)     | 小カテゴリー          | 具体例                                  |
|------------------|-----------------|--------------------------------------|
| スポーツ参画意欲の向上 (40) | 「する」意欲 (10)     | ・もう一度私も学生時代のスポーツをしようと思った             |
| ①「する」意欲          | 「みる」意欲 (19)     | ・マスターズ甲子園だけでなく、高校野球、プロ野球を観戦したいと思いました |
| ②「みる」意欲          | 「ささえる」意欲 (11)   | ・現役高校生のサポートをよりやっていこうと思いました           |
| ③「ささえる」意欲        | 家族関係の充実 (17)    | ・家族関係が良好になる                          |
| ④絆の深まりと広がり (31)  | 人間関係・交流活性 (14)  | ・地元に戻った時には、高校の同級生にもっと会おうと思いました。      |
| ⑤今後の原動力 (23)     | 活力・生きがいの獲得 (11) | ・普段の生活を頑張ろうと思えた。                     |
|                  | 夢や目標による感化 (12)  | ・自分もマスターズの甲子園を目指してみようかなと思った          |
| ⑥新たな活動意欲の喚起 (22) | チャレンジする意欲 (17)  | ・年齢を重ねても、何か本気で取り組めるものを見つけたい          |
|                  | 趣味欲の高まり (5)     | ・自分も趣味で続けている楽器を頑張ろうと思えた。             |
| ⑦観戦対象への期待 (6)    | 選手・チームへの期待 (5)  | ・広めて、いろんな人に参加して欲しい                   |
|                  | 大会への期待 (1)      | ・地元の高校が出てほしいと思った。                    |

スポーツ直接観戦の影響とスポーツ参画状況の関連

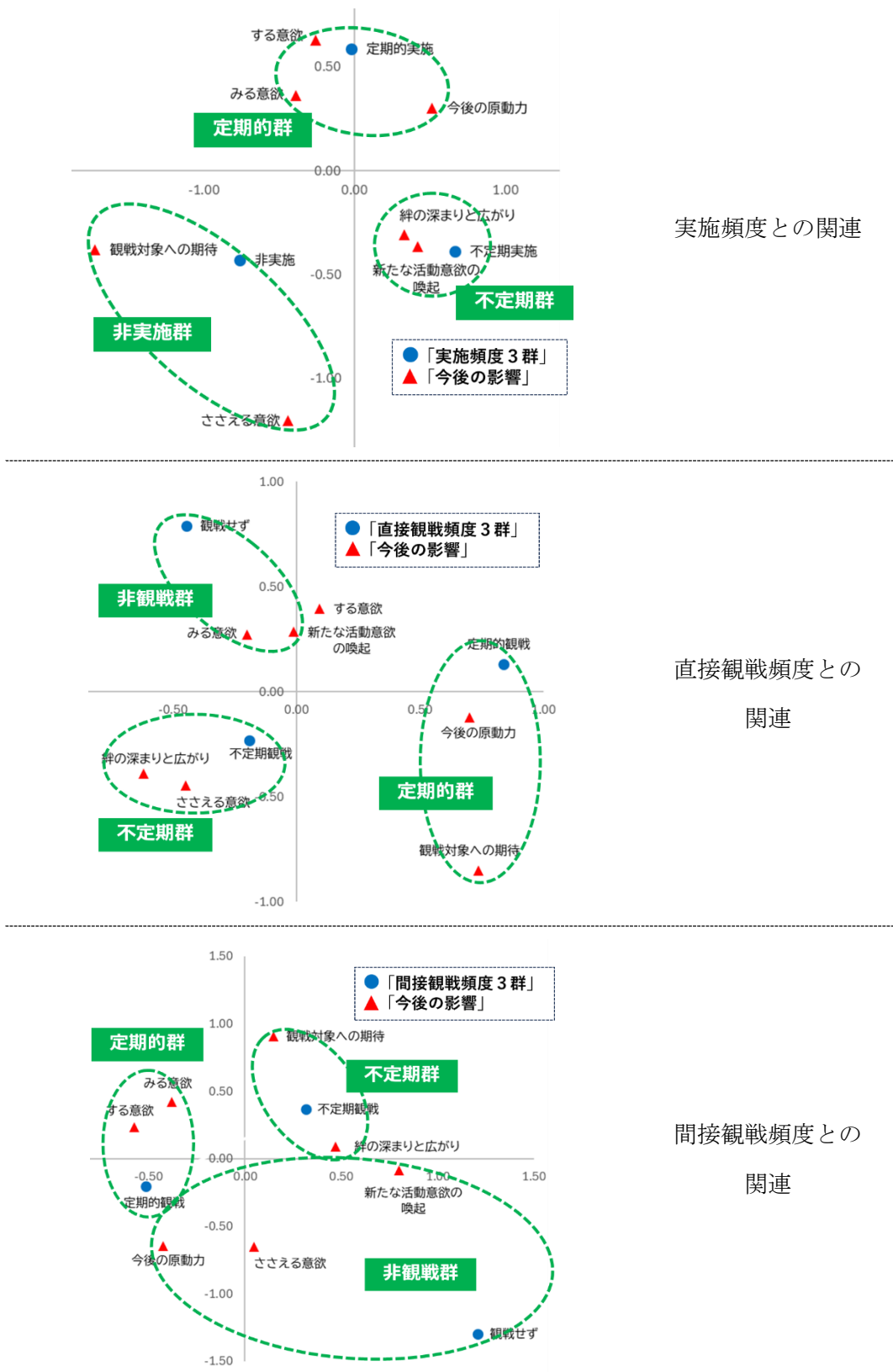


図 1. 今後予測される自身への影響と運動・スポーツ参画状況との関連